

日本語版面接者訓練強化ツール（EIT-JP）の効果検証

萩野谷俊平^{1,2)} Pekka Santtila¹⁾

1) New York University Shanghai 2) 法政大学大学院ライフスキル教育研究所

<要 旨>

本研究では、性的被虐待児童を想定したアバターへの面接シミュレーションを行う EIT (Empowering Interviewer Training) の日本語版による訓練効果を、臨床心理士を対象として検証した。臨床心理士資格を有する 32 名の参加者は、訓練効果を高める介入方法の種類に応じて、フィードバック (F: n=10)、モデリング (M: n=11)、フィードバックとモデリング (MF: n=11) の 3 条件にランダムに割り当てられ、4 体のアバターに対してそれぞれ最長 10 分間の面接を実施した。その結果、すべての介入方法で面接に用いられるオープン質問の数が増加し、専門知識・技術を有する臨床心理士においても面接技術の向上に寄与することが示された。また、フィードバックのみを用いる介入に比べて、フィードバックとモデリングを組み合わせた介入を用いることにより、より少ない面接回数でオープン質問の数が大きく増加した。このことから、新規に提案するモデリングを介入に加えることで、面接技術の向上が強化・効率化されることが示された。

<キーワード> 虐待、捜査面接、司法面接、シミュレーション、モデリング、臨床心理士

【はじめに】

先行研究により蓄積された児童への面接に有効な質問方法に関する実証的知見に基づき、報告者らは性的被虐待児童を想定したアバターへの面接シミュレーションを行う EIT (Empowering Interviewer Training) を開発し、その有効性を確認してきた (e.g. Pompedda et al., 2014, 2017)。これまでの研究では、大学生等を対象としてアバターへの面接を複数回繰り返し、各面接後に事案の結末と質問方法に関するフィードバックを提供することで、被訓練者の面接技能が向上することが示されている。一方で、実際に現場で児童への面接を行う専門家への訓練効果はまだ検証されていない。

臨床心理士は、警察や児童相談所、医療機関、学校等の幅広い職域で、虐待被害の疑いがある児

童への面接を行う機会の多い専門家であり、臨床心理士を対象とした実験的な検証を行うことで、EIT の有効性を示すことが期待できる。

また、フィードバックによる訓練では、面接で用いる望ましい質問の比率が 80%に達するためにおおむね 8 回の面接実施が必要であり、より短時間で同等の訓練効果を実現する介入方法を見出す必要がある。行動モデリング訓練 (Behavior Modeling Training: BMT) は、Bandura (1977)が提唱した社会的学習理論に基づく心理学的訓練介入法であり、(1) 明確に定義された一連の行動 (スキル) を説明する、(2) それらの行動の効果的な利用を示すモデルを提供する、(3) 訓練生がそれらの行動を使って練習する機会を提供する、(4) 実践後の研修生へのフィードバックと社会的強

化の提供、(5) これらの行動を職務に最大限に反映させるための対策を講じる、という5つの要素で構成される。BMTに従えば、現状のEITによる訓練では(3)と(4)を実装しており、さらにモデリングの手段として(1)と(2)を加えることで、より効果的な訓練を実現することが期待できる。

そこで本研究では、日本語版EIT (EIT-JP) の訓練効果を専門家である臨床心理士を対象として検証するとともに、新たな介入方法としてモデリングの手段を追加し、その訓練効果およびフィードバックとの相乗効果を検証した。

【方法】

参加者

臨床心理士資格を有する21歳から59歳 ($M = 35.1, SE = 8.8$) の32名 (男性10名) が、クラウドソーシングサービス及びSNSを用いたスノーボール法による募集に応じて参加し4000円の謝金を受け取った。13名 (41%) が児童への面接に関する研修の受講経験を有し、25名 (78%) が児童に対する面接経験を有していた。

研究デザイン

本研究は3 (介入方法: フィードバック (F)、モデリング (M)、フィードバックとモデリング (MF); 参加者間) × 5 (面接回数: 1回目から5回目; 参加者内) の混合要因計画であり、参加者はランダムに F ($n = 11$)、M ($n = 12$)、MF ($n = 12$) の3条件に割り当てられた。

材料

音声通話 実験は、LINE株式会社が提供するソーシャル・ネットワーキング・サービスであるLINE、またはマイクロソフト・コーポレーションが提供するインターネット電話サービスであるSkypeの音声通話機能を用いて遠隔で実施した。

補助資料 アバターへの面接シミュレーション

以外の手続き (同意書作成、属性情報入力など) については、グーグル合同会社が提供するGoogleフォームを用いて作成した補助資料を使用した。**EIT-JP** アバターへの面接シミュレーションに用いるEIT-JPは、年齢 (4歳と6歳)、性別 (女性と男性)、虐待事実の有無が異なる8つの条件にそれぞれ2体のアバターを作成した計16体で構成され、質問タイプ (誘いかけ、促しなど) と児童の返答内容に関する心理学的知見に基づく返答選択アルゴリズムを搭載している。訓練では、面接者が口頭で行った質問をオペレータが質問タイプにコード化し、入力されたコードを返答選択アルゴリズムが処理することで、アバターの返答が自動で選択、再生される (Fig 1)。

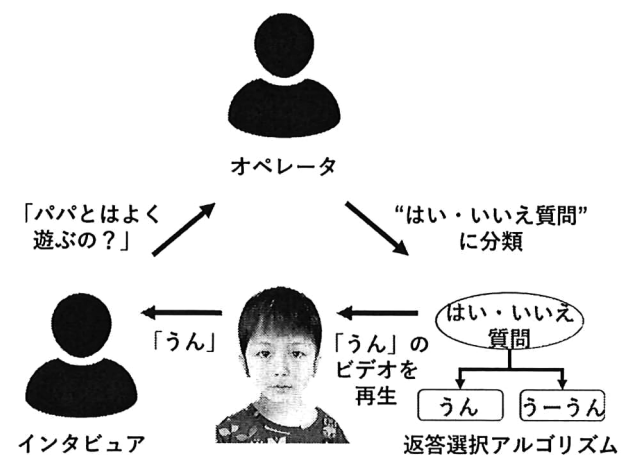


Fig. 1 面接シミュレーションの概要

質問分類 質問の分類は、先行研究 (Korkman, Santtila, & Sandnabba, 2006; Sternberg et al., 1996) にしたがった類型を用いた (Table 1)。各実験の質問の分類は、4名のオペレータが分担して実施した。3名は過去に実施した研究でそれぞれ10件以上の実験を実施し、質問の分類方法を共有している。残りの1名については、質問の分類方法を一致させるため3件の予備実験を実施し、その記録を他の研究者が確認して、他の3人と一致しない部分については議論し一致する基準を定めた。

返答選択 EIT-JP は、質問タイプごとにアバターによる返答のセットと各返答の確率を設定したアルゴリズムを搭載している (Table 2 を参照)。面接におけるアバターの記憶と被暗示性に関する実証的研究知見に基づき、アルゴリズムの構成は4歳と6歳で異なっている。

事案の解明に関係する情報 (以下、関係情報) と事案に無関係の情報 (無関係情報) は、望ましい質問に対してのみ提供される。各アバターは関係情報と無関係情報を9つずつ持っており、1回

の返答で1つずつ提供される。関係情報と無関係情報はそれぞれ決められた順序で提供され、関係情報の最後の4つに、事案について正しい結論を得るために必要な情報が含まれる。面接者が望ましい質問を尋ねたときに関係情報と無関係情報が提供される確率は、4歳でそれぞれ12.5%、6歳でそれぞれ25%に設定されている。

また、面接の現実感を高めるため、各アバターには周辺的な情報も備えられており、それらの情報はキーワードごとにまとめられている。これら

Table 1. 各質問タイプの説明と例

質問タイプ	説明	質問の例
望ましい質問		
誘いかけ	誘導的でなく子どもから自由な発話を引き出す質問。	「最初から最後まで、あったことを全部教えて」「家族についてお話して」
促し	子どもの返答に対して、さらなる発話を促す非誘導的な質問。発話内容の明確化を求める場合もある。	「その後何があったの」「続けて」「それから」
WH	子どもがすでに言及した内容に子どもの注意を向けさせて、さらなる説明を求める質問。	「ママとどこに行ったの」「何のゲームをしたの」
望ましくない質問		
はい・いいえ質問	子どもがまだ言及していない事実に子どもの注意を向けさせるが、特定の種類の返答を暗示しないクローズド質問。	「パパと遊ぶの」
明確な誘導質問	子どもがまだ言及していない事実を仮定して、どのような返答を期待しているかを示す質問。	「パパが嫌なことをしたの」「パパは悪い人」
不明確な誘導質問	子どもがまだ言及していない事実を仮定せず、どのような返答を期待しているかを示す質問。	「お話しすることあるのは分かっているよ、お話して」
繰り返し質問	2回以上連続で同じことを尋ねる質問。	
長すぎる質問	二つ以上の内容について一度に尋ねる質問。	「お父さんと一緒にどこにいたの、あとそこでどんなことしてたの」
あいまいな質問	子どもの認知レベルでは難しすぎる単語を含む、または文法的に不明確な質問。	「ママとパパの関係はどんな感じ」
選択式質問	特定の返答に子どもの注意を向けさせる、または選択肢から選ぶよう強制する質問。	「サッカーの練習は貫太君と行ったの、それとも三浦さん」
時間に関する質問	6歳以下の子どもでは発達が不十分な時間的な認知プロセスに依拠した質問。	「いつママは公園を離れたの」
感情に関する質問	6歳以下の子どもでは発達が不十分な感情の認知プロセスに依拠した質問。	「おじいちゃんのことどう思う」
想像力を求める質問	子どもの空想を促し、不正確な答えを生み出す可能性がある質問。	「あなたがパパだったらどう思うと思う」

Table 2. アルゴリズムにおける質問タイプごとのアバターの返答

質問タイプ	アバターの返答
望ましい質問	「うん」、「うーうん」、「知らない」、関係情報、無関係情報
はい・いいえ質問	「うん」、「うーうん」、「知らない」
明確な誘導質問	「うん」、「うーうん」、「知らない」
望ましくない質問の繰り返し	「うん」、「うーうん」、「知らない」
選択式質問	「最初に言ったやつ」、「最後に言ったやつ」、「知らない」
不明確な誘導質問	「なんていうか分かんない」
時間/感情/想像力	「もう終わりでもいい」
長すぎる質問	「うん」、「うーうん」、「わかんない」、ランダム情報
望ましい質問の繰り返し	「なんていうか分かんない」、「もう終わりでもいい」、「わかんない」、「もういい、なんにもしゃべんない」

の情報は、面接中にリストとしてオペレータに表示され、面接者の質問に該当するキーワードがあった場合にリスト中の情報を手動で選択することで、対応する返答が再生される。たとえば面接者が「おじいちゃんとはいつも何ををするの」と尋ねた場合、「望ましい質問」のアルゴリズムを起動する代わりに、オペレータは祖父に関連する周辺情報のリストの一番上にある情報を選択し、対応する返答の動画が面接者に再生される。周辺情報は望ましい質問に対してのみ提供され、リスト内のすべての情報が提供されるまで、キーワードに対応する動画が再生される。一方で、いずれのキーワードにも該当しない質問（またはすべての情報が面接者に提供されたキーワードを含む質問）、および事案に関する質問については、望ましい質問に対するアルゴリズムが起動される。

誤情報（アバターが保有する情報に矛盾する情報）は、面接者が望ましくない質問をすることで生み出される。アバターが保有する情報は返答のセットとして事前に定義されており、それらとの不一致により誤情報は検出される。たとえば、虐待被害に関する情報を持たないアバターに対して「パパに痛いことされたの」と質問し、返答アルゴリズムが「うん」と返した場合に誤情報が生

み出されたと判断できる。

手続き

各実験は2時間から2.5時間を要した。参加者は初めに同意書を作成し、属性（性別、年齢、現在の職業及び従事年数など）に関する質問に回答した。次に、子どもに対する望ましい面接方法に関する教示文（Appendix 1を参照）を確認し、教示の理解を確認する2つの質問に回答した。いずれかの質問に誤答をした場合、参加者は再度教示文を確認するよう求められた。

本研究では、16体のアバターのうち2体（6歳/女性/虐待ありと4歳/男性/虐待なし）をモデリングの手続きに使用したため、各実験では、残りの14体のうちランダムに選択した4体のアバターを使用した。参加者は、まず各アバターの虐待被害が疑われるに至った経緯の文章（例をAppendix 2に示す）を確認し、事案に対する面接前の印象について、虐待の有無およびその判断に対する確信度（「50%：なんとなく」から「100%：まちがいない」）を尋ねる2問に回答した。参加者は、性的虐待の調査に焦点をあてた質問を行う以外は自由に面接を行うこと、面接は最大10分間であり、アバターから十分に情報が得られたと思えば10分が経過する前に面接を終了できることを教

示された。以上の手続の後、参加者は面接を実施した。なお、面接中の音声は録音された。

各面接の終了後、参加者は面接で得られた情報を踏まえて虐待の有無に関する結論を回答するとともに、アバター及びその周囲で起きた出来事についてできるだけ詳しく回答するよう求められた。その際、性的虐待があると判断した場合は虐待の状況や虐待の行為者について、性的虐待がないと判断した場合は実際は何が起きていたのかについて記述するよう教示された。参加者の結論は、誰がどこでどのような虐待行為に及んだか、または虐待のないケースで実際に何が起きていたのかに関するすべての情報が報告された場合のみ、正しい結論としてコーディングされた。

FとMFでは、参加者は1回目から4回目の面接後に、事案の結末に関する情報と質問方法（面接中に使用された望ましい質問2問と望ましくない質問2問の計4問）に関するフィードバックを受け取った。質問方法に関するフィードバックでは、実際に面接で使用した質問に加えて、該当する質問タイプに関する説明と得られる返答の信頼性に関する情報が提供された。4回のフィードバックに使用する質問は、可能な限りすでにフィードバックを提供した質問タイプとは異なるタイプの質問を優先的に選択した。

MとMFでは、質問方法に関する学習のポイント（良い面接と悪い面接の例）の資料を確認した後、モデリングの対象となる動画を視聴した。動画は、まず虐待ありの事例（6歳/女性）について良い面接と悪い面接の動画を視聴し、次に虐待なしの事例（4歳/男性）について良い面接と悪い面接の動画を視聴した。参加者は、各事例の動画視聴前にアバターの虐待被害が疑われるに至った経緯を確認し、視聴後に事例の結末を確認した。

統計分析

3（介入方法：F、M、MF；参加者間）×5（面接回数：1回目から5回目；参加者内）の2要因分散分析を、望ましい質問の数、望ましくない質問の数、面接中の全質問に占める望ましい質問の割合、得られた関連情報の数、生み出された誤情報の数について実施した。関連情報の数を除く4つの分析において、Mendozaの多標本球面性検定により分散分析の前提条件が満たされないことが示され、すべての分析でイプシロン（ ϵ ）が.75未満であったことから、Greenhouse-Geisserの方法による自由度の修正を行った（Girden, 1992）。また、2回目以降の面接で正しい結論に至った割合（Fig. 1F）を参加者ごとに算出し、介入方法（F、M、MF；参加者間）について1要因分散分析を実施した。

平均値の信頼区間には一般的に両側95%信頼区間が用いられるが、95%信頼区間同士の重複の有無は、有意水準 $\alpha = .005$ で帰無仮説 $H_0: \mu_1 = \mu_2$ を棄却し $H_0: \mu_1 \neq \mu_2$ を採択する検定とおおむね同等であり（Payton, Greenstone, & Schenker, 2003）、一般的に用いられる有意水準 $\alpha = .05$ に比べて非常に保守的な比較となる。Maghsoodloo & Huang（2010）およびPayton, Greenstone, & Schenker（2003）によれば、比較する2つのサンプルの標準誤差の比に応じて信頼区間を調整することで、信頼区間の重複の有無がおおむね有意水準 $\alpha = .05$ の検定と対応することが示されており、標準誤差の比が大きいほど $\alpha = .05$ に対応する信頼区間の範囲は広がる。本研究で行う比較では、すべての対において標準誤差の比が4以下であったことから、やや保守的な基準として標準誤差の比4に対応する89.4%信頼区間を採用した。

加えて、介入方法と面接回数の交互作用を調べ

るため、Holmの方法による多重比較を実施した。

【結果】

記述統計

1回目の面接における全体の平均値は、望ましい質問の数が10.6 ($SD=6.6$)、望ましくない質問の数が16.1 ($SD=7.9$)、望ましい質問の割合が38.1 ($SD=19.6$)、関連情報の数が2.6 ($SD=1.8$)、誤情報の数が2.5 ($SD=2.0$)であった。また、全参加者の18.8%が正しい結論に至った結果から、本研究の課題が非常に困難なものであったことがうかがえる。

従属変数間の相関をTable 3に示す。望ましい質問の割合は、関連情報の数および正しい結論の割合と有意な正の相関がみられ、誤情報の数と有意な負の相関が認められたことから、アルゴリズムは質問タイプに応じて正常に機能していた。

質問タイプ (Fig. 1A,1B,1C)

ANOVAの結果から、望ましい質問の数における介入方法 ($F[2, 29] = 15.62, p < .001, \eta_p^2 = .52, 1 - \beta > .99$)、面接回数 ($F[4, 116] = 62.93, p < .001, \eta_p^2 = .68, 1 - \beta > .99$)、の主効果と、介入方法と面接回数の交互作用 ($F[8, 116] = 3.82, p < .001, \eta_p^2 = .21, 1 - \beta > .86$) が認められた。

単純主効果の結果 (Table A1) から、1回目を除くすべての面接回数で介入方法の主効果がみられ (1回目: $p = ns$, 2回目: $p < .001$, 3回目: $p < .001$, 4回目: $p = .001$, 5回目: $p < .001$)、すべての介入方法で面接回数の主効果がみられた ($F: p < .001$, $M: p < .001$, $MF: p < .001$)。

望ましくない質問の数では、面接回数的主効果 ($F[4, 116] = 28.84, p < .001, \eta_p^2 = .50, 1 - \beta > .99$) と、介入方法と面接回数の交互作用 ($F[8, 116] = 2.58, p < .05, \eta_p^2 = .15, 1 - \beta > .25$) が認められたが、介入方法の主効果はみられなかった。

単純主効果の結果 (Table A2) から、すべての面接回数で介入方法の主効果はみられず、すべての介入方法で面接回数的主効果がみられた ($F: p < .001$, $M: p < .001$, $MF: p < .001$)。

望ましい質問の割合では、介入方法 ($F[2, 29] = 6.56, p < .01, \eta_p^2 = .31, 1 - \beta > .79$) および面接回数 ($F[4, 116] = 67.01, p < .001, \eta_p^2 = .70, 1 - \beta > .99$) の有意な主効果が認められたが、介入方法と面接回数の交互作用はみられなかった。

単純主効果の結果 (Table A3) から、1回目を除くすべての面接回数で介入方法の主効果がみられ (1回目: $p = ns$, 2回目: $p < .01$, 3回目: $p < .01$, 4回目: $p = .05$, 5回目: $p < .01$)、すべての介入方法で面接回数的主効果がみられた ($F: p < .001$, $M: p < .001$, $MF: p < .001$)。

関係情報および誤情報の数 (Fig. 1D, 1E)

ANOVAの結果から、関係情報の数における介入方法 ($F[2, 29] = 8.08, p < .01, \eta_p^2 = .36, 1 - \beta > .98$)、面接回数 ($F[4, 116] = 23.44, p < .001, \eta_p^2 = .45, 1 - \beta > .99$)、の主効果が認められたが、介入方法と面接回数の交互作用はみられなかった。

単純主効果の結果 (Table A4) から、1回目と4回目を除く面接回数で介入方法の主効果がみられ (1回目: $p = ns$, 2回目: $p < .01$, 3回目: $p < .01$,

Table 3. 各従属変数の平均、標準偏差および相関係数 (正しい結論の割合については相関比)

	<i>M</i>	<i>SD</i>	1	2	3
1.望ましい質問の割合 (%)	69.7	24.6			
2.関連情報の数	5.7	3.1	0.76***		
3.誤情報の数	1.3	1.6	-0.51***	-0.33***	
4.正しい結論の割合 (%)	18.8	39.2	0.12***	0.07***	0.01

*** $p < .001$.

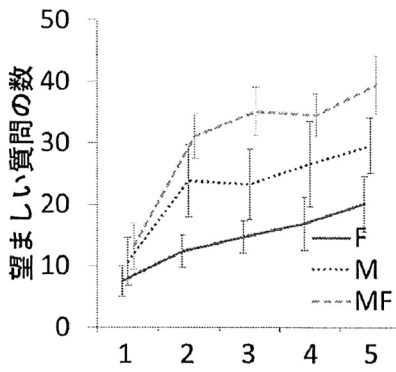


Fig. 1A 望ましい質問の数

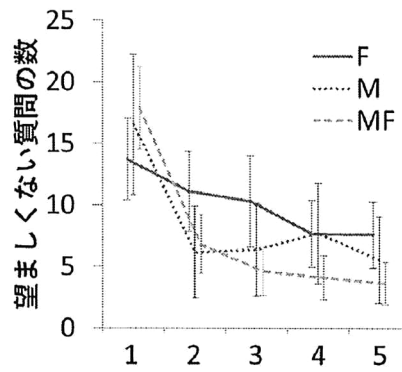


Fig. 1B 望ましくない質問の数

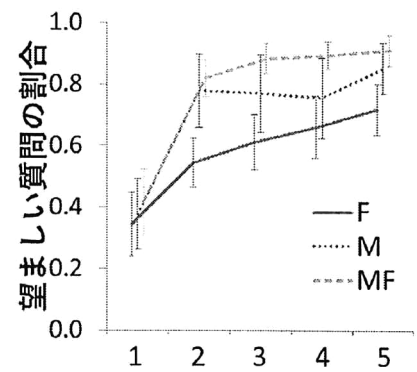


Fig. 1C 望ましい質問の比率

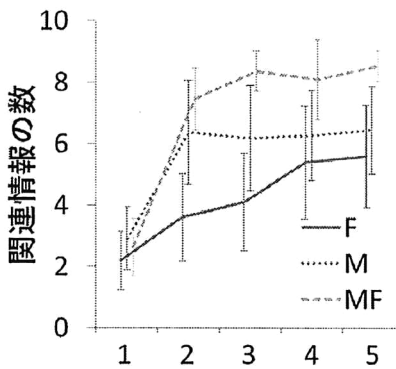


Fig. 1D 関係情報の数

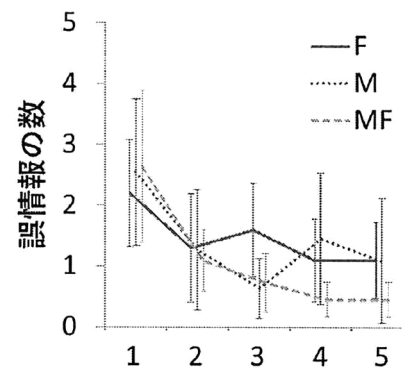


Fig. 1E 誤情報の数

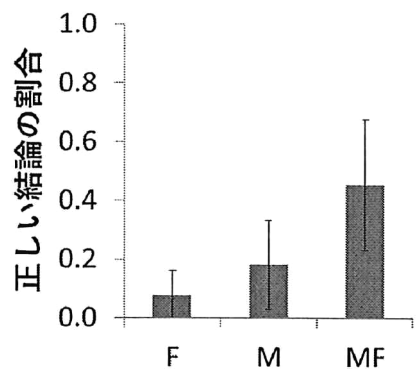


Fig. 1F 2~5回目の正結論比率

Figure 1. 介入方法ごとの質問方法, 得られた情報および正しい結論に至った割合

4回目: $p = ns$, 5回目: $p < .05$), すべての介入方法で面接回数の主効果がみられた (F: $p < .05$, M: $p < .001$, MF: $p < .001$)。

誤情報の数については、面接回数 ($F[4, 116] = 7.14, p < .001, \eta_p^2 = .20, 1 - \beta > .99$) の有意な主効果が認められたが、介入方法の主効果と、介入方法と面接回数の交互作用は認められなかった。

単純主効果の結果 (Table A1) から、すべての面接回数で介入方法の主効果がみられず、MF のみにおいて面接回数的主効果がみられた (F: $p = ns$, M: $p = ns$, MF: $p < .001$)。

正しい結論に至った割合 (Fig. 1F)

ANOVA の結果から、2回目から5回目の正しい結論に至った割合における介入方法 ($F[2, 29] = 6.78, p < .001, \eta_p^2 = .32, 1 - \beta > .32$) の有意な主効果が認められ、多重比較により MF と F ($p < .01$)、

MF と M ($p < .05$) の間で有意差が認められた。

【考察】

本研究では、臨床心理士を対象として3つの介入方法を用いた EIT-JP による訓練効果を比較した。結果から、すべての介入方法で望ましい質問の数と割合の増加、望ましくない質問の数の減少が認められ、現場で児童への面接を行う可能性の高い専門家に対しても、アバターを用いたシミュレーションによる面接技術の向上が示された。

介入ごとの比較では、F に比べて MF で望ましい質問の割合のより大きな増加が認められ、特に望ましい質問の増加がより顕著になることで、面接技術の向上が強化されることが示された。また、MF では3回目の面接でおおむね90%近くまで望ましい質問の割合が向上した。前述のとおり、従来用いられるフィードバックのみによる介入で

は、望ましい質問の割合が 80%に達するためにおおむね 8 回の面接実施を要することから、介入にモデリングの手続きを加えることで、面接技術の向上が大きく効率化された。

Table 3 に示した変数間の相関から、望ましい質問の割合の増加によってアバターからより多くの関係情報が引き出されて正しい結論に至る割合も高くなり、反対に誤情報が生み出された数は少なかったことがうかがえる。なかでも正しい結論に至った割合が F に比べて MF が高かったことから、MF においてより多くの望ましい質問が用いられることで、正しい結論にも至りやすかったことが見て取れる。しかしながら、関係情報の数について F と MF の間に常に有意差が認められたわけではなく、誤情報については介入方法の主効果も認められなかった。関係情報の数について見られた F と MF の差の変動は、EIT-JP が関係情報を含む返答の選択に確率分布を介する返答選択アルゴリズムを用いているためと考えられる。また、誤情報は主に望ましくない質問によってアバターが誤った返答をすることで生み出されることから、望ましくない質問の数に差がみられなかったことにより、生み出された誤情報の数に差がみられなかったと考えられる。

以上の結果から、EIT-JP による面接訓練は、専門知識・技術を有する臨床心理士においても面接技術の向上に寄与することが示唆されたとともに、介入方法としてフィードバックとモデリングを組み合わせることで、より短時間の訓練で面接技術を向上させられることが示された。

今後の展望としては、まだ EIT について検証されていない、実際の虐待面接への訓練効果の転移を検証するとともに、訓練効果の転移を強化する介入（たとえば、訓練後に被訓練者に目標を設定

させるなど）について検証する必要がある。また、向上した面接技術の経時的な減衰傾向の確認とブースターセッションによる訓練効果の維持を、縦断的研究により検証することで、面接者訓練へ持続的に寄与する手法として確立していきたい。

【文献】

- Bandura, A. (1977). *Social learning theory*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall.
- Girden, E. R. (1992). *ANOVA: Repeated measures*. (No. 84). Sage.
- Korkman, J., Santtila, P., & Sandnabba, N. K. (2006). Dynamics of verbal interaction between interviewer. *Scandinavian Journal of Psychology*, 47(2), 109–119.
- Maghsoodloo, S., & Huang, C. Y. (2010). Comparing the overlapping of two independent confidence intervals with a single confidence interval for two normal population parameters. *Journal of Statistical Planning and Inference*, 140(11), 3295–3305.
- Payton, M. E., Greenstone, M. H., & Schenker, N. (2003). Overlapping confidence intervals or standard error intervals: What do they mean in terms of statistical significance? *Journal of Insect Science*, 3(34), 1–6.
- Pompedda, F., Zappalà, A., & Santtila, P. (2015). Simulations of child sexual abuse interviews using avatars paired with feedback improves interview quality. *Psychology, Crime & Law*, 21(1), 28–52.
- Pompedda, F., Antfolk, J., Zappalà, A., & Santtila, P. (2017). A Combination of Outcome and Process Feedback Enhances Performance in Simulations of Child Sexual Abuse Interviews Using Avatars. *Frontiers in Psychology*, 8, 1474.
- Sternberg, K. J., Lamb, M. E., Hershkowitz, I., Esplin, P. W., Redlich, A., & Sunshine, N. (1996). The relation between investigative utterance types and the informativeness of child witnesses. *Journal of*

Applied Developmental Psychology, 17(3), 439–451.

【APPENDIX】

APPENDIX 1. 子どもに対する望ましい面接方法に関する教示文

正しい発問方法についてのガイドライン

面接中の子どもの振る舞いは、大人の振る舞いと大きく異なります。特に、小さな子どもには誘導されやすいという特徴があります。子どもは大人が伝えた情報を「正解」として認識するとともに、面接者が間違えたことを言ったとしても、それを否定しない傾向があります。

こうしたことから、子どもに面接する際に用いるべき発問方法について、以下のことが推奨されています。一般的には、オープンな質問を用いることが推奨されています。なぜなら、オープン質問は信頼できる回答を引き出しやすいからです。

オープン質問には、以下の3種類があります。

1 誘いかけ：子どもから自由な発話を引き出すために使われるオープン質問です。代表的なものは、「最初から最後まで、あったことを全部教えて」といったもので、「それについて、もっと教えて」のように、子どもが述べたことを掘り下げるものも含まれます。

2 促し：誘導することなく、発話を続けるように促します。「それから？」のような発問や、子どもがすでに述べたことを繰り返す（オウム返しする）ことを含みます。

3 WH 質問：これらの質問は、子どもがすでに述べたことに焦点を当て、さらなる詳細について尋ねます。（例：「そのとき、あなたはどこにいたの？」）

一方、クローズド質問や誘導質問は避けるべきです。こうした質問によって引き出された回答は信

頼性が低だけでなく、子どもに誤った記憶を作り出すかもしれません。

クローズド質問や誘導質問は、以下の質問を含みます。

4 はい・いいえ質問：これらは、子どもがまだ述べていないことについて焦点を当てるものの、特定の回答が期待されていることをほのめかすものではありません。こうした質問に対する子どもの典型的な回答は、「はい」や「いいえ」です。

（例：「お父さんがあなたのちんちんを触ったの？」）

5 誘導質問：これらの質問は、どのような回答が期待されているかを強く示したり（例：「お父さんに無理やり触られたんだよね？」）、子どもがまだ述べていない事実を推認して行われる質問です（例：「誰かがあなたのちんちんを触ったと思うんだけど、誰にやられたか教えて」）。

教示の理解を確認する2問

問1 虐待について子どもが詳細な事実を話さない場合、面接者は虐待の状況について直接的に尋ねるべきだと思いますか。

質問の例：お父さんが触ったのかな？

○そう思う

○そう思わない

問2 子どもが虐待の事実について、「男の人が私のこと叩いた」と述べた場合、それに対して以下のどの質問をするのが最も適切だと思いますか。

○痛かった？

○誰が叩いたの？

○その男の人は、お父さんかな？

APPENDIX 2. 虐待被害が疑われるに至った経緯

陽菜、4歳

陽菜（はるな）（4歳）は、認知的な発達にやや遅

れはありますが、活発な女の子です。両親と兄の陽太（ようた）君（12歳）と同居していて、たまに叔母さんがいることもあります。両親の教育水準が低く、母親の成美（なるみ）が精神障害を抱えているため、家庭環境はよいものとはいえません。父親である達也（たつや）の判断で、陽菜は幼稚園に通っていません。父親は、陽菜が生まれ

た後に陽菜の母親と結婚した男性で、陽菜の実の父親ではありません。父親が陽菜の世話をしている間は、陽太君が、母方の叔母と一緒に母親の面倒を見ています。陽太君と叔母は、陽菜の腕に複数のアザがあることに気付きました。アザの治療のために診察を受けたところ、医師は虐待の可能性を否定していません。

Table A1. 望ましい質問の数における単純主効果の検定

	df_{Effect}	df_{Error}	F	p	η_p^2	$1 - \beta$
介入方法/2回目	2	29	14.60	<.001	.50	>.66
介入方法/3回目	2	29	17.05	<.001	.54	>.74
介入方法/4回目	2	29	8.82	<.01	.38	>.43
介入方法/5回目	2	29	13.82	<.001	.49	>.65
面接回数/MF	4	40	88.01	<.001	.90	>.99
面接回数/M	4	40	14.73	<.001	.60	>.99
面接回数/F	4	36	7.70	<.001	.46	>.99

Table A2. 望ましくない質問の数における単純主効果の検定

	df_{Effect}	df_{Error}	F	p	η_p^2	$1 - \beta$
面接回数/MF	4	40	27.94	<.001	.74	>.99
面接回数/M	4	40	6.70	<.001	.40	>.98
面接回数/F	4	36	6.66	<.001	.43	>.99

Table A3. 望ましい質問の割合における単純主効果の検定

	df_{Effect}	df_{Error}	F	p	η_p^2	$1 - \beta$
介入方法/2回目	2	29	8.20	<.001	.36	>.39
介入方法/3回目	2	29	6.45	<.001	.31	>.29
介入方法/4回目	2	29	4.37	<.01	.23	>.18
介入方法/5回目	2	29	5.68	<.001	.28	>.25
面接回数/MF	4	40	55.77	<.001	.85	>.99
面接回数/M	4	40	21.63	<.001	.68	>.99
面接回数/F	4	36	10.97	<.001	.55	>.99

Table A4. 関係情報の数における単純主効果の検定

	df_{Effect}	df_{Error}	F	p	η_p^2	$1 - \beta$
介入方法/2回目	2	29	6.19	<.001	.30	>.28
介入方法/3回目	2	29	7.39	<.001	.34	>.35
介入方法/5回目	2	29	4.49	<.001	.24	>.19
面接回数/MF	4	40	37.88	<.001	.79	>.99
面接回数/M	4	40	5.97	<.001	.37	>.99
面接回数/F	4	36	2.98	<.001	.25	>.87

Table A5. 誤情報の数における単純主効果の検定

	df_{Effect}	df_{Error}	F	p	η_p^2	$1 - \beta$
面接回数/MF	4	40	6.43	<.001	.39	>.97